

『万葉集古義』と『巧者学術』

——封建規範の矛盾とその自覚過程——

鴻 巣 隼 雄

(一) 前書 き

佐佐木信綱先生の御生前の御仕事の中で、万葉集研究史に関する業績こそ最も偉大なものの一つである。ことに「万葉集古義」をあらわして、近世末までのすべての研究を集成綜覧した鹿持雅澄の研究成果について、早くから注目し、機会ある毎に世に紹介されたばかりでなく、「古義」を中心とする雅澄自身の研究普為に対し、独自の広い視野と深い視角で臨まれ、その後先生の誘掖を受けた幾多の先学が果した、雅澄の古典研究体系を解明する作業の基礎作りを先覚者としてお示しになったものである。

先生は明治三十二年四月博文館発行の『続日本歌学全書』第九編として「近世長歌今様歌集」を編纂されるに当り、未発表の雅澄翁の「山斎長歌集」を取め、これに正確な解題を施されているのは、翁に関する研究の端緒を開かれたものである。恐らくこれに刺戟されたのであろう、明治四十一年十一月に山本修三氏編の歌文集『山斎集』が翻刻されたが、先生はその序文の中で、

万葉集の研究は古くは源順に始まり、仙覚律師を経て契沖阿闍

梨、賀茂真淵翁にいたりぬ。而してそを大成せし学者として予の最も尊敬するものを鹿持雅澄とす

と述べられた。大正三年六月に刊行した寺石正路先生の『土佐偉人伝』に見える記事及び昭和九年刊行の『南学史』にある「土佐万葉学」の項も、恐らく信綱大人の説を郷土史の資料で敷衍されたものと思う。

さらに『校本万葉集』首巻にある諸本輯影の中で、久松潜一先生との御協力のもと、「古義」を中心とする翁の重要編著を詳細に解題された功は、翁の業績に関する史的展望を試みる者にとって、殆んど唯一の力づよい指標となっている。又昭和十九年十二月に養徳社から刊行された『国文秘籍解説』の「鹿持雅澄の著書目録」で「古義」をはじめとする数多くの著作の成立年代を物語る貴重な奥書類をお示しになっている。いずれも研究史上の重要な基礎作業として銘記すべきものばかりである。

(二) 雅澄と儀七郎

鹿持雅澄は鹿持家の六代目に当り、三代目に儀七郎という有能な

人物がいて、二人は同じように晩年御徒歩役から白札格に召し上げられた。雅澄はその学業により、儀七郎は勤務の功による。鹿持はもとの姓でなく、古く柳村姓を名のつた。儀七郎と雅澄は柳村家累代の中で最も注目すべき人物である。二人の奉公した仕事は、一見異なつたように見える。しかし儀七郎は二十六歳から四十歳まで、江戸藩邸との間を幾度も往復し、人望のある下級実務家として働き続けた。雅澄も長上や同僚から通称源太と呼ばれ、地方徴税吏など軽格の家職にふさわしい勤務に就いている。いづれも初代久兵衛以来の卑賤な役目を忠実に果す微禄の人物に過ぎなかつた。しかし最も大切な二人の共通点は他にある。

儀七郎は実務家としての手腕以外にすぐれた資質を持つていた。即ち雅澄につながる文筆の才である。文筆に親しんだその生活は、今残る著作その他で想像出来るよりもはるかに活発なものであつたらしい。儀七郎の著作、手控え、記録、及び手許にあつた手記をはじめとする蔵書類の書目は、宮内庁書陵部にある「鹿持雅澄蔵書目録」で凡そ知ることが出来る。その著作の主なるものには、『巧者学問』（飛鳥雅四氏蔵）『紫霞尊翁歌集』（同上蔵）『部鄙の言葉』（飛鳥井玉衛旧蔵）『西灘紀行』（同上蔵）、所在不明のものに「江戸の名残」『服薦録』（共に前述の「鹿持雅澄蔵書目録」に見える。）がある。

（註記）儀七郎の旧蔵書の中にはこの他に「俳諧書廿五冊」「浄瑠璃本一冊」が見え、その多趣味な生活がうかがわれる。

（三）「巧者学問」其の一

儀七郎の文筆活動の一つを代表する「巧者学問」は、紺地に雷紋総ぎの摺模様、美濃判、袋綴題愈には「巧者学問全」とあり、本文十枚、最後にこの書を浄書した安並雅景の手になる文化二年六月廿二日の跋一枚がある。書名は題愈によるべきであるが、跋文の記事中にも、宮内庁蔵の「鹿持雅澄蔵書目録」にも「巧者学術」と見えている理由は明らかでない。但し本文中に（6才）

（前略）乞食にも腹立させぬハ隣里郷党に寝めうらやまる、事

只此術の徳ならずや何ぞ聖賢の書を読んでかくと、のほんや扱こそ父子君臣夫婦長幼朋友の倫ひとつとして欠たる事なし何ぞ聖賢の教を守りてかく全からんや猶も巧者の人事に尋ねて向上の工夫すべき也（下略）

とあるに由来すると思う。即ち「世渡りを巧みに巧者にする者の学術」であるから、「巧者学術」の「方」が論旨には近い。

雅景は跋の中で、父の雅明と三代儀七郎とが面識のあつたことを「予が父かつて其人をしれり、才識学文ありて和歌俳諧をよくせり」と明らかにしているが、軽格柳村儀七郎の有能な実務家としての活動と豊かな文筆の才が、上級武士の雅明に面識の機を得させたのであろう。雅景が伝写し、飛鳥井家が入手した経路も、伝写の年が雅澄十五歳の文化二である事から考えると、宮地仲枝などを仲介にして、雅景と雅澄が友垣を結んだ際、かつて写してあつた本を雅景の手から渡したと思われる。跋の中で、儀七郎の人物を「簡重温

潤の長者なりしといふ」と批評しているのも、恐らく父の得た印象を、雅景が、自分なりに表現したのであろう。

(四) 「巧者学問」其の二

この著作の内容は、まず巻頭に「序」と題して、晋の魯褒の「錢神論」の一部を引用してから、本文の筆を進めている。本文は二つの部分、即ち仮に名づけると、第一部、及び第二部にわかれる。

「錢神論」を引用した序の全文は

晋魯褒錢神論曰親愛如兄フシカシクアヲシテコトヲコトフ字曰孔方ニシテ失之則貧弱得レバ之則富強富シク強ク無レ翼而飛翼ヲ失フ無レ足而走足ヲ失フ解レ嚴毅之顔解シテ聞レ難發聞カレズ之口口ヲ錢多者ハ処レ前前ニ錢少者ハ居レ後後ニ錢神之德神ノ徳ニ誠ニ盛盛ニ也也哉哉其其學學文文神神德德如如天天滿滿自自在在天天神神亦亦逢逢之之則則匍匍匐匐頂頂禮禮而而閉閉口口云云

とあり、この著作の全内容を最初に暗示している。右のうち「無翼而飛無足而走」までの前半は晋書卷第九十四所収の「隱逸伝」魯褒の条にある

魯褒字元道、南陽人也、好學多聞、以貧素自立、元康姓姓名、而著著錢神論、以刺之、其略曰、錢之為ニ體、有ニ乾坤之象、內則其方、外則其圓、其積如山、其流如川、動靜有時、行藏有節、市井便易、不患耗折、難折象壽、不匱象道、故能長久、為ニ世神寶、親之如レ兄、字曰孔方、失之則貧弱、得之則富昌、無翼而飛、無足而走云云

によつたものである。尤も当時の人々が親しんでいた「本草綱目」の古文錢の釈名の部にも

泉孔方兄、土清童子、青蚨

李時珍曰、(中略)魯褒錢神論云、為ニ世神寶、親愛如レ兄、

字曰孔方。

とあって、或はこれを手がかりにして、筋の運びに示唆を得たものであろうか。一体、「巧者學術」には藥劑の調査、医師の処置等に關してかなり微細な描写があり、作者はかねてから医書の内容にも関心を持っていたと想像出来るからである。

序では、金錢の万能を「錢神」の力にたとえ、その「無翼にして飛び、無足にして走(ノオ)る無比の神通力を人は何にかにつけ、借り用いなければ、富強になれず、常に貧窮に呻吟するが、その「嚴毅なかんばせ」に恐れず、これと対面して、親しく言葉を交わし、教を請うだけの勇氣ある者が、初めて余徳にあずかることが出来る。例えば、元來金子には全くゆかりの薄い「學文の神」「天満大自在天神」の如き神通力盛んな神も、この「錢神の前に立つと、無力な神になり下り、徒らに、身をかがめ、匍匐し、額づいて」錢神にその席を譲るに過ぎぬ。つまり無意味にも人倫を説き、次第に無力化し傾斜の道をたどって行く行學者の群を揶揄すると共に、一方には金子の前に左右を顧みず跪拜する愚しい世態、無智なにわか成金の浮身をやつす虚栄と浪費を皮肉ろうとしている。ことに蕩々たる世相に流されて行く知識層の急激な形骸化について暗に揶揄しようとした趣意が読みとられるように思う。

さて本文では全体を二部に分け、第一部は、「むかし唐カラの国に」以下六枚目の表まで。まず「唐の国に生得の聖人」で「人の賤むべき道」を教えたとす一群の人がいた(ノオ)。就中「父子君臣夫婦長

幼朋友」にそれぞれ「親義別序信」の五条の徳目を小賢しく規定し、利口才竟ぶって(一オ)あたかもそれを自分の發明であるかのように誇らしげに人に説き廻っていたが、元來この道も、聖人が愚案發明の結果た易く出来上るようなものではなくて、「生れぬ先から」の先驗的規範であることに気付かない。だから今もってこの流派を汲むと自認している人々の中には、「書捨ての反故に愧む」ことを唯一の學問と心得、論語の言葉「巧言令色鮮矣仁」の一句を一つ覚えのように、「常言として」用い、我が身の力を省みず、資質以上の結果を求める徒勞にはよくよく配慮すべきで、聖人の道を追窮するにも人により、質により、各人それぞれの限度がある筈である。

それが証拠に、人の世が開けて以來、聖人と呼ばれる中にも、孔子の如き本格的な人物は極くまれで、「無疵の人」と呼ばれるのは恐らく彼一人であろう。孔子門下にも勿論「三千人」の徒があり、「その中の七拾人」が僅かにすぐれ、厳選すれば「其中に十余人」を得るに過ぎぬ(二オ)。しかるにそれさえ師の心には叶わず、その点、子貢、子路いずれも同様で、僅かに「顔子一人」が例外であった。

孔子を継承した孟子も、師の道を述べ、巧みな弁舌の力にまかせて、相手を説き伏せ、晩年は「聖人を去る事髪筋程と」(三オ)云われた、すぐれたその資質にもかかわらず、僅かに「千載の跡に名をとどめ」たに過ぎぬ。その後に出た阿南の兩程子も孔孟の跡をつぎ、特に「大学」を重んじて、「敬の工夫」をこらし、中でも兄の「明道先生は朝から晩まで土木偶の様に」(三ウ)振舞い、「弟子衆は」当時みな誰もその所作に感じ入ったが、「今の世に左様の者は」

とても通用せず、恐らく「氣違ひの様に沙汰せられ」と思う。それでも有名な朱子は、なおこりずに「兩程子に荷担し」「彼の古反故どもにさまさま」の註を施して「小学」を撰し、世の軽薄な風潮を正そうと計ったが、「是程世に益なきハさまさま知れて居る」筈を、今日までその學統を継承している一派がある。人も知る有名な「彼見先生などを初め誰の彼のと古反故を讀て」(四オ)甲論乙駁に目を重ねてみても、少しも口すぎの具にはならず、めぐまれぬまま「一生素浪人にて仕廻られたる人」がいかにも多いことか。この嚴肅な事実を見ても、空虚な道の提唱は徒勞に終るのみならず、世間から遊離する結果を招き、決して幸福をもたらすものでない。

だからこそ「熟思ふに卑賤の學問は只功者の術を習ふ」がよい。ただし卑賤の者は、とかく学ぶ資質を持ち合わせないから、目的を達するためにも、今更「双紙の端一つ覗くに及ばず。まして「仁の義のと角の立たる」理窟をのべる要もない。「身貧にしてハ世に用ひられず忠孝全からぬ」が浮世のきびしさであろう。卑賤の者にはまず「格物致知」よりも実益を収める「取物致徳の工夫」こそ何より肝要である。

そもそも「仁をすれば富まず富をすれば仁ならずとの名言」の通り、人情・道義を立てること富致の道とは互に相入れぬから、まず蓄財の目的を遂げた後、毎日でも酒食に飽き、風采もあがれば、自然に人も尊敬し、肉親の母も、その境遇の変化を心から悦んでくれる。されば万事「志より」(五ウ)もまず「口を養ふ」が肝要であろう。「酔飽の機嫌に任せて権門に徘徊し主人を初め從者迄に逢ふたびに音物の礼をいはれ」果ては「忠孝の名」をもあたりに響か

せ、「妻妾は衣食に余り」「櫛笄に七十万錢をもちとはず」衣裳の「染模様を案ずる外」に思うことなく、「万事自在」で、召使いで食に飽き、「初鯉の頭を喰はず」「猫も炬燵の上に輪に成て鼻の先なる鯉節をバ嗅でもみず」「虱は白く」丸々と、「犬は真黒に肥ふとり」物乞いの乞食にもその都度、義理を欠かず、今は専ら

隣里郷党に褒めうらやまるる事只此術の徳ならずや何ぞ聖賢の書を、読てかくとゝのはんや扱てこそ父子君臣夫婦長幼朋友の倫ひとつとして欠たる事なし何ぞ聖賢の数を守りてかく全からんや

と思えるような、満ち足りた境遇に到り得る。これも富致の道を実利第一に勵んだ処世術の勝利である。

徒らに聖賢の書にふけり、その数を後生大事に墨守しても、生活万端の不如意のみを招く。従つて聖賢の説く古反故の典拠にならうより、義理、人情に背くとも、むしろ富致の道一筋にはげむが、かえつて自然の人間関係に行きつく、捷怪であるとした。即ち徹底した功利主義とにわか成金の浪費振りに皮肉な笑いを向けながらも、他方、聖賢の道はその権威を金力にいさぎよく譲り切つてしまつた今の世相を揶揄しているのが、作者が第一部で見せた趣意である。

(四) 「巧者学問」其の三

第二部とも云うべき後半部は、六枚表の「鳶と鷺を争ひ」以後巻末までで、作者は第一でのべた原則論の具体例を示そうとしている。即ち世渡りにいかに金権が強く作用するかを、まず間接に、鳶と鷺とが互に美声を争つた偶話にたとえた。鳶は判者を鳳凰に依頼

する際、自分の不利をさどつて、「ひそかにしたゝか成物」を、かねて内々より鳳凰の御もとへ贈り、勝利を目録んだ。これに反し、鳶は美声をたのみ、手を尽さずにその場に臨み(六〇)、当日は一同が感じ入るほどの美声で演じ、聞くものは誰も鳶の勝利を疑わぬ程であつたが、判者は意外にも「いかに、鳶のひいと出たる所ハやさしけれど跡のよろよろハうれハし鷺は何となく面白き所あり若いかに」と同座の孔雀、鶴、みそさゞいに同意を求め、鳶の勝ちを宣した。すべて分不相応なおごりは不測の結果を招来するから、劣弱卑賤な者ほど細心の注意をおこたらず、例によつて巧者の術を使う要がある。

又第二に、有名な「揚震の四知」と呼ばれる故事を漢籍から引用し、「千金を懐中にして来た」客の好意を「天知る神知る我知る汝知る何ぞ知らずといふや」(七〇)と「苦々敷云ひ」放ち、金子を投戻したのを心から惜しんだ。当時こそ「天も人も狼に物を取るハ不義」とし、彼も「清廉」という徳目に負けて「目の前の錢財をつき戻し」はしたが、後世ハ「天地神人も知てしらぬふり」をするのが常である。だから揚震の態度をたゞえるのは時代錯誤としており、もしかりにこんな気分になつたら、貧乏神につかれた思まわしい姿だと考え直すがい。多額の錢財を得る偶然の好機は決して取逃すべきでない。右の揚震の故事は、後漢書の卷八十四、「揚震伝」に載っているが、十八史略にも引かれている。

作者はこれら二つを例示した後、にわか成金の潤歩する市井生活を背景に、これと対照的に、尾羽打ち枯した貧しい一名医を登場させ、いかに身過ぎの拙い姿を戯画化して見せる。博識で、医者

理にも通じ、本来なら名実共に恵まれた名医であるべきに、彼は朴訥で人にへつらうことを知らず、「病家を見舞にも貧富の依怙なく」従って「世に用ひられず家貧しく」いわば心の奇形ともいうべき名医であった。かごに乗って羽振り好くまかり通る医師を見ると、つい近頃まで「山伏の強力」をつとめ、かご掻きを渡世にしていたひどい成り上り者であることを妻はなげく。かような人たちは、仮名付きの医師手ほどの書もろくに読めぬ文盲ばかりだから、病人の手当一つ満足に出来ぬが、「世間の脈を」上手に取る事を世渡りの主眼にし、身をかぎめて相手に取り入り、やがて「十人扶持」に取りつき、間もなく「知行」取りの身にさえなる。

妻は夫に右の処世術にならうよう再出発を提案する。妻の言葉に励まされ、ふとそのに気になった夫を、折よく来診を乞いに来た「十死一生の躰」の急病人のもとへ送った。病人は診察をひどく急いでいる様子である。医師は言葉の継ぎ穂を失い、ただ妻に教へられた通り不つり合いな挨拶を連発して、遂に「気がい坊主」と異名を蒙ってしまったという。博識であつてもただ朴訥のみで、世を渡り切れないあわれな名医をこのように第三話として最後に据えている。

(六) 諷諭的方法

まず最初に掲げた序で、万能な「銭神」の力を讃え、ついで第一部では、無意味に人倫の道を説くだけで、金力からは無縁なものとして放逐され、次第に無力化し、傾斜して行く、術学者流の群を擲喰し、ことに土佐藩学の主流に直接繋がる筈の浅見一派の朱子学の

正系をものはばからず批評している如き、明らかに金権の支配する世相の潮流に押し流されて、その座に沈湎し、生活の苦悩をつぶさになめている代表的知識層を取り出したものと思う。勿論筆者は江戸藩邸にあって渉外の事務に長くたずさわり、下級軽格の身は、武士と商人層との接觸面を以ってその対立矛盾をきびしく体験していた。だからこれら知識層に対立する、市井の者の不条理なまでの功利的拜金主義と徹底した現実偏重の物質万能主義を故意にとり上げ、皮肉にも「取物致徳」という秘訣を、世渡りの最も有効な「巧者の術」と考えてその原則を富致の道に当てはめ、勝利を占めて行った、庶民層の生活を描いているのだと思う。

第二部は、その原則を具体化した例を示そうとし、特に「卑賤の学問は只功者の術を習ふ」とあるように、作者が「功者の術」を習うべき対象として、まず「卑賤」の身の上につき配慮したことが明らかである。その場合、生得の資質などは意に介せず、ただ分相應「格物致知」とは逆に、専ら「取物致徳」の工夫をはかるべきだとして、その工夫が見事に成功した例をあげている。第一話の薦、第二話の清簾な四知で名高い揚震は、共に世にさからい、「巧者学術」には全く無関心で、終生幸運を把めなかつた。最後の第三話に登場する名医も同様である。だがこれには俗世に適應して行く心得のある妻の有効な助言があり、この助言を受けて立った名医の失敗はそれだけに一層皮肉に受けとられる。この時代の知識層を形成しているのは、学者、神官、僧侶、医師であるが、このうち、医師だけは、仁術を要求される手前、功利に走ってはならぬ筈なのに、案外金の権威の支配する現実を否定せず、自分も市井の人として富致の道

を追求できるという、いかにも矛盾した性格を持っている。その上、人並以上に銭財を蓄え、同時に俸禄にあずかって、仕官の生活も、望めば必ずしも不可能ではない。いわば上級者と庶民の間に介在して、そのいづれをも包み得る、知識層の中でも極めて特異な型の身分であった。成功の期待が大きければ、逆に失意の打撃もきびしい。その時残るのは、形骸と化した知識層のうつろな敗北感である。世に敗れた医師を作者が最後の結びに据えて効果をねらった意図も明らかである。

しかし有能な実務家であり、同時に文学的な資質にめぐまれていた筆者は、術学者の五倫道徳を笑い、土佐藩学の主流に近い浅見綱齋の学統を皮肉り、これと矛盾する、不条理なまでの拜金主義、物質万能主義にも余裕のある批判を加えつゝ、世風の赴く所を静かに見つめて、みずからは出来るだけ時代錯誤を避け、徳目によらぬ自然な人間関係の成立を喜ぶという、いかにも庶民らしい、新鮮柔軟な気分で「巧者な処世術」を諷諭的に提示しているように思う。もちろん仕官しても、高い俸禄にはきびしい限界があり、まして蓄財の機も到底与えられない庶民の儀七郎は、おのずから和歌、俳諧の世界に遊んだが、自分の健康な夢を託することの出来るような、積極的な人間像を「巧者学術」の中で構想することは出来なかった。儀七郎のこの意識が「巧者学術」の諷諭的な方向を規定したものである。そして儀七郎の子である儀三亟(四代)も、その和歌の詠草を今日に伝えている(「紫霞尊翁歌集」参照)から、雅澄(六代)が種子の形で受けとっていた柳村家の文学的資質は、家系の土壌の中で、数代前にすでに、発芽の準備を整えていたものと云ってよい。

つまり儀七郎は「紫霞尊翁歌集」に見えるような堂上風の和歌の世界を諷詠した。そして一方では、すでに形骸と化した道義をなお説きつづけている術学者流の悲哀と富民の齷齪、浪費との矛盾を示唆しようとし、身過ぎの道に拙いため敗北した医師と、世俗に迎合することで勝利を収めている無知な流行医とを対比し、皮肉な諷諭的方法で戯面化を試みている。そして儀七郎は、聖賢の権威が金力に席を譲りつつあるきびしい現実を直接立ち向かおうとはしないが、この「巧者学術」の中で、可能な限り、自然な人間関係に行きつく道をどこまでも求めようとしていることは明らかである。その場合、彼は「ひとつとして欠けたることなき」「父子君臣夫婦長幼朋友の倫(五まじ)という規格にはまった表現を一応は用いたが、「聖賢の書」で説く、仁義をはじめとする武士的な規範に対してはあくまで強い疑問を投げかけ、ことに武士層を支配してきた朱子学の権威に対して、富致の道との間に横たわる矛盾を婉曲に否定瓊化しているのである。後に藩学の蕩播期に出て、封建倫理の矛盾に苦しみ、その結果、軽格の身にふさわしく、儒学に対置されるはずの国学の流派に棹さし、生涯を国学の研究に捧げた雅澄の意識は、源流を儀七郎のこの書の中に探り出すことが出来る。

註 拙稿「鹿持雅澄にかかわる家系の再検討」(上代文学第十四号昭38・7)参照